



静脩

1990年7月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 27, No.1

学術情報としての生物標本

農学部教授 岩井 保

“南の海に怪獣 長さ10メートル重さ2トン
ニュージーランド沖 漁船が死体を拾う”（朝日新聞1977年7月20日）。かなり綺談的な見出しに煽られて、南の海のネッシー騒ぎは、その年の夏、街のあちこちで話題になった。ニュージーランド沖の漁場で、大洋漁業のトロール漁船の網にヒレのある巨大な爬虫類らしい死体がかかったが、腐敗がひどく、漁獲物に影響が及ぶのを危惧した船長の命令で棄ててしまった。漁船に同乗していた加工主任が投棄寸前の怪物の写真と、自ら描いた観察記録を持ち帰った。鑑定を依頼された学者は「首長竜（プレシオサウルス）のように思えるが、骨の一部でもないと断定できない」と残念がった。これが記事の大筋だった。読者の反響は意外に大きかったようで、“世紀の大発見 廃棄に歯ざしり シーラカンス以来だ”（同日夕刊）と続いた。首長竜の仲間だ。いやサメの仲間だ。甲論乙駁はあったが、興味はやはり数千万年前に絶滅したといわれる首長竜のような動物が海中のどこかにまだ生きている可能性に集中し、夏の夜の夢を脹らませるように記事は飛躍していった。新聞や週刊誌が大騒ぎをした末に、約半月後には、幸いにも唯一の物証として保存されていた約20本ほどのヒ

レの軟条に含まれるコラーゲンのアミノ酸分析によって、謎の動物はサメの仲間であることが分かったが、怪獣への未練は捨てきれないかのように尾を引いて、しばらく消えようとしなかった。

この報道姿勢には最初からいささか気になるところがあった。写真をよく見れば背ビレと胸ビレがあり、専門家なら難なく大型のサメと同定できたはずだが、なぜかサメ説の声は小さく扱われたきらいがある。大きな獲物が棄てられたために、視覚に訴える情報量の不足が怪獣説を助長したことは否めないが、ヒレの残骸は貴重な情報を提供したことになる。もしそれがなかったら、架空の情報ばかりが独り歩きする懸念があっただけに、加工主任の対処は妥当であったといえよう。

当時、怪獣説が願望を込めて拡がった裏には、生きた化石魚シーラカンス発見物語の再来を願う思いがあったにちがいない。1938年12月22日、南アフリカのイーストロンドン博物館に勤務するラチマー女史にかかってきた電話からこの話は始まる。その日、近くの海で漁をしていた知合いの漁夫の網に、サメと一緒に1匹の大きな怪魚が入ったのである。女史はわざわざ漁港へ出向き、青い金属光沢を放つ異様な魚を見て驚き、タクシーを

呼んでこれを博物館へ運んだ。早速スケッチと計測資料に手紙を添えて、高名な化学者であり魚類学者であるロウズ大学のスミス教授に意見を求めた。クリスマス休暇で大学を離れていた教授がこの知らせを手にしたのは、年が明けた1月3日のことだった。その魚が絶滅したと信じられていたシーラカンスの仲間であると直感した教授は、折り返しラチマー女史に事の重大性を電報で知らせた。しかしその時には、すでに問題の魚から肉と内臓を取り除いて、剥製にする作業が進んでいた。保存設備が十分でなく、内臓が腐敗し始めたからである。2月17日にイーストロンドンを訪れたスミス教授は剥製になった標本を調べ、それが紛れもなくシーラカンスの仲間であることを確認した。“生きた中生代魚類”と題する短報が『ネーチャー』(143巻3620号、1939年)に発表された時、世界中の学者は驚異の念を抱いて注目した。この大発見はラチマー女史的確な処置によって保存された標本に負うところが大きい。標本から内臓を除去したことに対して、一部の学者から批判があったといわれるが、スミス教授は地方博物館の窮状を説いたうえで、ラチマー女史の功績を称え、この魚にラチメリアという新属名を与えた。

この出来事は当時日本でも話題になり、『科学』(9巻10号、1939年)はこれを詳しく紹介した。その中で標本の学術的価値を強調し、“特に吾国の如き天産豊富な世界の部分に於いて、願はくば上記の如き貴重な発見が繰返されるやう、そして上記の如き失敗が繰返されないやう、かゝる物語を反省の鑑として常時国民の科学的訓練を念としたいものである”と訴えたくだりは今日でも共感を呼ぶ。

スミス教授はその後もこの古代魚の仲間を追い続けた。努力の甲斐があって、1952年に二番目の標本がコモロ諸島近海で採捕された。そこがシーラカンスの生息場所であることは、現在では周知の事実となっている。

ここに紹介した二つの話は、社会的にも大きなニュースとなった珍しい事例であるが、いずれも学術情報としての生物標本の重要性を如実に示している。たとえそれが生きていなくても、その価

値は失われるものではない。古い標本でも、動物であれば骨の髄から毛の先にいたるまで、植物であれば樹の幹から花粉にいたるまで、夥しい情報が詰まっているはずである。しかも生物標本が内蔵する情報は多岐にわたる。単に姿形を映し出すだけでなく、環境変化の解明や、有用資源生物の探索などにも大きく貢献している。いかに正確に記載された記録があっても、標本の本体に含まれる情報には遠く及ばない。それゆえに古くから多くの学者は生物標本の整理収蔵施設の充実を強く求めてきた。欧米諸国では長い歴史をもつ国立の自然史博物館あるいは大学附置の博物館が随所にあり、麗大なコレクションはよく管理されていて、目的に応じて活用できるようになっている。また、標本資料の情報ネットワーク網ができていく地域もあって、学者は多大の恩恵を受けている。

これに比べて日本の現状は残念ながら大幅に遅れているといわざるをえない。近年、各地に博物館が増設され、標本の管理組織は改善される方向にあるが、学術研究上の要求に答えられるものはまだ少ない。とりわけ大学における生物標本の管理能力を危ぶむ声はあとを絶たない。すべての大学が該当するわけではないが、研究課題の変遷とともに、古くなった標本のたどる道はほぼ定まっているといわれる。それらはまず研究室の片隅から廊下へ出される。それから地下室とか倉庫へ転々と移され、年月がたつと所在不明という結末を迎える。そういう時の弁明もまた、「標本室にするような余分なスペースはない」とか、「維持管理に要する経費はないし、人手もない」など、とほぼ決まっている。その結果、過去に貴重な研究材料となった標本から、さらに高度な情報を引き出そうと思っても、標本そのものを捜し出すことすら容易でない場合が多い。まして利用のサービスを受けようなどという期待はまずできない。かつて国際会議に出席するために来日したミシガン大学の教授は、日本各地の大学を訪れて、明治・大正の頃に研究に使われた生物標本を再調査しようとしたところ、予定していた標本の8割は紛失していたり、戦災で焼失していて、手にすることができたのはわずか2割にすぎなかったと嘆き、

落胆の色を隠せない様子だった。事の次第を知った日本の学者たちは、それは滞在期間が短いことに起因するといった慰め、腰を据えて研究を続けるために再来日するようにすすめた。すると、

「長期間滞在すれば望みが叶うような状態ではないと思うが、折角のご助言だから100年後にもう一度考えてみましょう」と穏やかな口調ではあったが、鋭い言葉が返ってきた。

瀬戸臨海実験所所蔵の図書・資料について

瀬戸臨海実験所所長

教授 原 田 英 司

理学部附属瀬戸臨海実験所図書室は、海洋生物学関係の蔵書が国内では最も充実しているとされている。資料庫は実験所で最初に建てられた鉄筋コンクリート造の建物で、ここに図書室がある。その書庫は面積約100㎡で窮屈を忍んで中二階を設けて書棚が並べてある。一講座相当の施設の図書室としては破格のものである。70年近い歴史の中での先人の努力の象徴に外ならない。

とは言え、最近は関連分野の幅が広くなり、新しく出版される雑誌も多く、必ずしも随一の完備したものと言える状態ではない。特に、単行図書に関しては、元々格別特色ある収集がなされていたわけではなく、また近年の出版洪水にとっても応じていけるものではない。しかし、過去の業績がいつまでも参照され重要さを失わない、ある意味では過去に縛られ続ける宿命を背負った系統分類学の分野で海洋生物に関連した蔵書としては、今なお最も充実していると認められよう。

その第一は、19世紀から20世紀にかけて世界中で盛んに行われた海洋調査の生物関係の主要な調査報告書が揃えられていることである。実験所が創設された際に和歌山縣から寄贈された「Den Danske Ingolf-Expedition」・「Beiträge zur Naturgeschichte Ostasiens」・「Fauna und Flora des Golfes von Naepel」は、大学側の意向に添ったものであろう。その3年前に誕生した理学部の動物学教室図書として購入された「Reports on the Scientific Results of the Voyage of H.M.S.

Challenger during the Years 1873-76」(いわゆる Challenger Report)・「Sibiga-Expeditie」・「Résultats des Campagnes scientifiques accomplies sur son Yacht par Albert I^{er} Prince souverain de Monaco」などは、現在は実験所の図書室に所蔵している。「The Carlsberg Foundation's Oceanographical Expedition round the world 1928-30 and previous "Dana"-Expeditions under the leadership of the late Professor Johannes Schmidt」(いわゆる Dana Report)・「The Percy Sladen Trust Expedition to the Indian Ocean in 1905」などは実験所で購入したものであり、「Discovery Reports」・「The John Murray Expedition 1933-34 Scientific Reports」・「South African Animal Life. Results of the Lund University Expedition in 1950-1951」などは瀬戸臨海実験所振興会からの寄贈である。これらに所載された論文の多くは、海洋生物の系統分類学的業績として今なお重要なものであるが、例えば、Challenger Reportにある日本に立ち寄ったときの記事などは読物としても興味深い。

第二は雑誌類である。最近では出版社から刊行販売される雑誌や学会誌が多くなり、またそれに切り替えられたものも少なくないが、かつては大学や研究機関の出版物が重要な位置を占めていた。そうしたものの多くは、相互交換などの形で寄贈を受けられた。実験所では独自の研究報告(Publications of the Seto Marine Biological Laboratory)を出版しており、これが国内外の雑誌類の交換寄

贈を受けるのに大きな役割を果たしてきている。現在、実験所で受け入れている学術雑誌類のタイトル数は、諸種合わせて1200を超す。

第三は論文別刷などを含む寄贈個人蔵書である。実のところ、海洋生物関係の雑誌としては最も古い部類の「Journal of Marine Biological Association of the United Kingdom」・「The Biological Bulletin」の最初の相当巻は、動物学教室教授で実験所幹事を務めた故岡田要教授の寄贈によって完備したものである。「Archiv für Protistenkunde」は故阿部徹法政大学教授の寄贈蔵書に含まれていたものであり、その他の原生生物に関する図書・論文別刷も充実した貴重な収集である。故内海富士夫教授の寄贈蔵書の八放サンゴ類・フジツボ類関係の論文別刷は比類のないもので、多くの人々に利用されている。また、Ch. Darwinの「A Monograph on the Sub-class Cirripedia, with Figures of All the Species」(1851)やFritz Müllerの「Für Darwin」(1864)の原本もある。井狩二郎・野沢兼文・駒井卓・山路勇・時岡隆などの旧実験所教官から寄贈された図書・論文別刷も多数ある。

こうして、蔵書を充実するのにいろいろな手だてを講じているのは他の図書室と変わるところがない。しかし、それらを有効に利用に供するとなると問題は多い。単行図書・雑誌はまだしも、所蔵する論文別刷が一覧・検索できるようにすると少々の作業ではない。一部については図書カードを作成しているが、これが完了する見込みはまずない。雑誌・単行図書についても問題がな

い訳ではない。実験所の図書室では雑誌を“地理的”に、発行地国別に、配列している。慣れればどんな方式であっても不便はないが、初めて訪れる人には評判は良くない。加えて、薄くて見付け難いものもあり、また随時移動も余儀なくされる。こうしたことから、数年前から受け入れ雑誌についての情報をコンピューターデータベース化する作業を進め、外国雑誌については昨年完成させた。これによって、所蔵雑誌と所在(書棚番号)の一覧を掲出するとともに、必要に応じて利用者も所蔵雑誌の最新情報を調べうようにしている。

実験所には図書の外に生物標本などの多数の資料がある。付設水族館で飼育展示している動植物は重要な教育資料に外ならない。こうした標本の中に、いわゆる模式標本といわれる、新種が初めて報告されたときに基礎とされた標本がある。学問上の約束で、これは適切に保存保管するとともにその情報を公表することが、所蔵する研究機関に義務付けられている。実験所には動物350種余りがあり、研究棟の標本室に保管されている。この情報をやはりコンピューターデータベース化する作業を進めてきたが、ようやく完了したので、実験所研究報告に発表する予定である。また、八放サンゴ類などの将来の研究資料として貴重な収集標本も多数ある。変わったところでは、実験所建物の工事に際して発見された瀬戸遺跡の出土品の一部もある。

図書・資料は利用されてこそ意味があるもので、そのためにも可能なかぎり手を尽していきたい。

平成元年度 高額図書の購入報告

1. 継続図書

(1) 複数分野

- Bibliographic Guide to Government Publications.
- OECD Publications.

- 国際連合・国際機関及び主要国統計
- (2) 社会科学
有価証券報告書総覧(第1部上場)
- (3) 自然科学
Sadtler Spectra : Infrared Grating.

Sadtler Spectra : Infrared Prism.

Asia : China. (15 titles) Microfiche

2. 単年度購入図書

(1) 人文科学

- The American Archivist.
Vol. 1 (1938)–48(1985)
- The Complete Archives. Section 1 :
Correspondence & Index to the
Correspondence. Microfiche
- 静嘉堂文庫所蔵 歌学資料集成
第2編 勅選集 Microfilm 38 reels

(2) 社会科学

- Kolleksiia Literaturny po Sovetskoi
Pedagogike, 1920–1930 G.
Microfilm 53 reels
- Kraus Curriculum Development Library.
1985 & 1988 ed. Microfiche
- Law Reform Commission of Canada.
Publications, 1971–1988. Microfiche
- Records of the U. S. Department of State
Relating to Political Relations between
the United States and Japan, 1910–
1954. Microfilm 52 reels
- Statistical Data of Asian Area. East

(3) 自然科学

- ACS Symposium Series. 360–393
(1988–1989)
- Advances in Biochemical Psychopharma-
cology. Vol. 23, 30, 34, 35, 37,
39–45 (1974–1988)
- Advances in Experimental Medicine and
Biology. Vol. 199, 208, 214–216 A,
219–223, 225, 228, 230–243 (1986
–1988)
- Auk. 2, 3, 6–83 (1885–1966)
- Comprehensive Polymer Science : The
Synthesis, Characterization, Reactions
and Applications of Polymers.
7 vols. (1989)
- Photoinduced Electron Transfer.
Part A-D. 4 vols. (1988)
- The Federal Law of Science &
Technology, 1945–1984. Microfiche
- The Wiley / NBS Registry of Mass Spec-
tral Data. 7 vols. (1989)
- 植物遺伝資源集成 1–4, 索引 (1989)



平成元年度 特別図書の購入報告

番号	資 料 名	巻数・年	出版社(国)	備付部局
1	上杉本 千金方 (東洋医学善本叢書: 2期)	全7巻 1989	オリエント 出版社	文 学 部
2	Public Papers of the U. S. Presidents. Office of the President. Hoover to Reagan. (米国大統領公文書)	701 microfiches 1984	LLMC (US)	〃
3	真宗重宝聚英	全10巻 1987–1989	同朋舎出版	〃
4	Aurel Stein's Central Asia. (オーレル・スタインの中央アジア重要著作集)	Vol. 1–12 1988	Cosmo Pub. (II)	〃

番号	資 料 名	巻数・年	出版社（国）	備付部局
5	Oxford Psychology Series. （オックスフォード心理学叢書）	Vol. 1, 2, 4 – 8, 10–15 1984–1988	Oxford Univ. Press （ UK ）	文学部
6	Schriften zur Geschichte und Kultur des Alten Orients. Berliner Turfantexte （古代オリエントの歴史と文化の文献）	Vol. 1, 3, 6, 9, 12–15 1971–1985	Akademie Verlag （ GW ）	〃
7	Philosophical Investigations. （哲学研究）	Vol. 1–10 1978–1987	Oxford （ UK ）	〃
8	帝國教育 帝國教育復刻版刊行委員会編 大正 5 年 1 月–11年12月	402–485号 42冊 復刻版 1989	雄松堂出版	教育学部
9	JURIS-Classeurs : Droit International. （フランス法例集 国際法編）	9 vols. loose-leaf 1989	Techniques S. A. （ FR ）	法学部
10	Handbuch der Strafrechtswissenschaft und der deutschen Strafgesetzkunde. Tittmann, Carl August （刑法学及びドイツ刑法の手引）	（1806–1810） 4 vols. reprint 1988	Halle （ GW ）	〃
11	National Reporter System. Atlantic Reporter., Federal Reporter. etc. （全米判例体系）	54 vols. 1989	West Pub. （ US ）	〃
12	The Supreme Court Law Review. （カナダ最高裁法律雑誌）	Vol. 1 – 8 1980–1986	Butterworth （ UK ）	〃
13	New Advances in Economic Research. Blaug, Mark （ ed . ） （経済学精選学位論文シリーズ）	（1983–1987） 45 vols. reprint	Edward Elgar （ UK ）	経済学部
14	全国短期大学紀要論文索引 図書館科学会編	1985, 1986年版 全4巻	日本図書 センター	〃
15	Der Sozialist. (Sozialistische Auslandspolitik) Unabhängige Sozialdemokratische Wochenschrift. （ドイツ独立社会民主党週刊誌「社会主義者」）	（1918–1922） 4 vols. reprint 1988	Topos Verlag （ GW ）	〃
16	朝日新聞縮刷版 昭和19年7～9月–25年9～12月	17冊 復刻版	日本図書 センター	附属図書館
17	I. B. Z. : Internationale Bibliographie der Zeitschriftenliteratur. （国際学術雑誌記事索引）	Vol. 24 1988	Felix Dietrich Verlag （ GW ）	〃

「効率的遡及入力方法」について

—主題別研究集会の講演要旨—

学術情報センター教授 宮 沢 彰

最初におことわりしなければならないのですが、私のこの研究はまだ完成段階に入ったものではありません。とは言っても先日出ました科研費の報告書「大量文献情報遡及変換入力システムの高度化に関する研究」の中に中間報告を書いております。今日のお話はこの報告から進んだものではありません。同じ報告書の中により完成した研究である富山大学の米田・長谷先生の報告、名古屋大学の渡辺先生他の報告、九州大学の松尾先生他の報告等ありますのでそれらも参照していただければと思います。

もう1つ、この研究ではルールベースのプログラミングといういわゆるAI的手法を用いています。しかし目的はAI的手法の開発にあるのではなく、データベース作成という応用の中で、こういった手法がどこまで有効であるかテストすることにあります。このためAI的プログラミングそのものに興味をお持ちの方には期待はずれかもしれませんが、お許しください。

本題に入りましょう。目録の遡及入力というのは、カード等のこれまでの目録を、コンピュータで扱えるレコードにして（遡及変換）、総合目録等データベースに入力する（遡及入力）作業です。目録作成の機械化が進展して来た現在、図書館の目録全体をデータベースとするために必須の作業となっています。この作業のこれまでの方法にはオンライン入力とバッチ入力、その折衷法等ありますが、いずれも人手・コストのかかる方法です。

オンライン入力は新しい本の整理の時と同様にカードを見ながら端末に向かって入力して行きます。単純な方法ですがヒット率が高い時には最も安価で効率的な方法です。

バッチ入力のこれまでの方法は、カード上の標目、標題、出版事項等をマークする「タグ付け」、機械可読にする「パンチ入力」、既存のデータベ

ースとの重複を取除く等整合させる「照合調整」といった工程で行なうものでした。

これらの工程は殆ど人手によるものでしたが、今回の研究はこのうちの「タグ付け」を機械で自動的に行なおうというものです。もちろん「パンチ入力」の部分の機械化であるOCR入力と組み合わせればより一層の機械化が達成できますが、（これも考えてはいますが）今回の話とは別におきます。

目録カードを入力したものは、配置を持った文字列になります（図1）。ここからどの部分がどういうフィールドかを認識してレコードを作る（図2）のがフィールドの自動認識です。目録カードの文字列が文法に従っていてそれを解折するというのであればよく知られた技術ですが、残念ながら目録にはそういった文法はありません。

そこで使うのが、cmがついていれば大きさだろうとか、1984のような形であれば出版年であろうとか、1行目から始まっているれば標目（多くは著者名）だろう、といったような「知識」をもとに残りを推定して行く方法です。一見危なそうで、事実なかなか100%の認識はむづかしいのですが、十分な「知識」をもてば実用的な認識は可能になるだろうという予想なわけです。

実際に使用したシステムは、SUN3というワークステーションとOPS83というルールベースの言語です。文字列のパターンマッチにはレギュラーエクスプレッションを使用する方法をとりました。OPS83を使用した理由は、たまたま手元にあったから、というのがありますが、1)C言語等で書かれた外部ルーチンを利用できる、2)手続き型言語とルールベース言語の双方を持っていて、実際的なシステムが組み易い、3)実行速度が速い（と言われる）などのためです。

この手続き型とルールベースというのがわかり

にくいかと思えます。普通のプログラミング言語 FORTRAN とか C とか BASIC とかはみな手続き型言語で、こうしてああしてこうだったら次にこうして…、というようにプログラムします。これに対し、ルールベースというのは、こうだったらこうする、というルールを、処理の順番とは関係なく並べてプログラムします。そんなのでうまくいくのか、という疑問を持たれると思いますが、うまくいく様にプログラムすればうまく行きます。残念ながら、これによってプログラムを書くのが易くなったとか、わかり易くなったとかいうものではありません。

ルールベースの話をもう少し。使ってみてこの方式の良い点は、ルールの追加や変更に伴う副作用が少く、メンテナンスしやすいことです。最初は最小限のルールで開始して、うまくいかないデータを見つける度に、分析してルールを追加・変更するという開発方法がとれます。手続き型では処理の前の方を変更すると後の方に影響が出ることがしばしばですが、そのような心配がありません。

ただし、カード1枚分を読んで、パラメータの指定によりプリントしたり、行数、枚数を数えたりして、という仕事は手続き型で書く方がはるかに自然です。また、1×××という4桁の数字が最後にある、という文字列のパターンマッチもアルゴリズムが色々開発されていますので、手続き型で書くのが楽です。今回はレギュラーエクスプレッションによるパターンマッチのライブラリ関数を用いました。このようにC言語用のライブラリを容易に使える点も O P S 83 を用いた理由の1つです。

さて、このような形でシステムを作りまして、東大の全学総合目録カードの中から無作為に選んだ72件を処理した結果、正しく認識したのが44件約61%でした。まだ中間的な結果なのですが、実用レベルには少し遠いようです。ルールが対応しきれていないという理由と、形態的特徴による認識の限界という理由によるものと思えます。

ルールが対応しきれていない理由の1つは、この72枚の中にさえ、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、中国語、日本語（ローマ字）と多く

の言語が出現していることです。これはルールを増やしていくしかないでしょう。もう1つの形態的特徴というのは、区切字やいくつかのキーワードによる認識（cmなど）です。形態的特徴によって例えば「××、1896」というのが出版事項と認識しても、「××」が出版地か出版者かは地名や人名を知らないと判断できません。これに対してはデータベース参照による判断を組み込む必要があるのではないかと考えています。

最後に、感想を含めて今後の見通しを。結論から言いますと、目録のわかった人とルールの書ける人2~3人でかなり集中して時間を使えば、実用レベルには達するのではないかと思います。と言っても、どこまでやれば終りと言えるのかわからない、という悩みがあります。極端な事を言えば、東大のカードを全部入れて確認した時にやっと（東大用として）完成した事になる。実際にはそこまで行かなくとも、元の目録の誤りと同程度の誤認識率ならばほぼ実用的ではありません。それにしても、どこまでやればそうなるかについてはもう少し経験をつむ必要がありそうです。

もう1つは、このアプローチをオンライン入力方式と比較した時の問題点です。オンライン方式は、レコードがヒットすれば記述を入力する必要がありません。これに対しこの方式ではともかくも全文字を一旦は入力しなければならないわけで、ヒット率の高い場合のオンライン入力より効率的にするには O C R 利用が不可欠でしょう。

Chibret, [Paul].

Astigmatisme selon et contre la regle resultats compares de l'examen objectif (keratometrie, skiascopie) et de l'examen subjectif.

Par, Steinheil, 1890. 80 (Pm.)

(Bd.w.: Exploratio oculi, Untersuchung des Aiges (4). Refractio et accommodatio oculi.

Refraction und Accommodation (8). Astigmatismus. Abhandlungen: 347-9.)

図-1 カード入力例

HDNG: Chibret, [Paul].

TR: Astigmatisme selon et contre la regle resultats compares de l'examen objectif (keratometrie, skiascopie) et de l'examen subjectif

PUB.P: Par

PUB.N: Steinheil

PUB.Y: 1890

PHYS.S: 80 (Pm.)

NOTE.PTB: (Bd.w.: Exploratio oculi, Untersuchung des Aiges (4).

Refractio et accommodatio oculi. Refraction und

Accommodation (8). Astigmatismus. Abhandlungen:

347-9.)

図-2 認識結果

学術情報センターにおける研修

教養部閲覧掛長 森 稔 夫

昨年の11月から12月にかけての4週間、学術情報センターで行われた平成元年度第2回総合目録データベース実務研修に参加した。この研修の目的は学術情報センターと接続している大学図書館において、総合目録データベースの構築を推進するための中心となる指導者を養成し、各大学図書館において目録業務担当者の指導を行うとともに、地域講習会において講師を担当する、というものである。今回は北大から鹿児島大にいたる国立大学から15名、私立大学から1名、計16名が参加し、以下のような内容で研修が行われた。

1)講義

学術情報センターシステムの概要
総合目録システムの設計思想と展開
情報検索サービス
学術ネットワーク
目録情報処理の国際的動向

2)総合目録演習・実習

端末操作と目録登録の基礎
入力基準の解説
NCデータの点検
MARC (JP, TRC, LC, UK) 変換の理解
地域講習会の企画と運営
地域講習会用テキスト作成
NACISIS-IR実習

この研修についての体験記などはこれまでも他大学の図書館報などにいくつか載っているのだから別の機会に譲り、ここでは視点を変えて学術情報センターにおける研修について概観してみたい。

今から丁度10年前の昭和55年に学術審議会から文部大臣に対して『今後における学術情報システムの在り方について』という答申が出された。その骨子は 1)一次情報の収集整備と提供のシステム 2)情報検索システムの整備 3)データベース

の形成、などを推進する必要がある、そのためには中枢となる機関が必要であるというものである。それを承けて既に昭和51年5月に東京大学に設置されていた情報図書館学研究センターがその中枢的役割を果たすべく拡充整備され、昭和58年4月には東京大学文献情報センターと改組され、昭和61年4月に現在の学術情報センターへと発展したものである。中枢的機関としての学術情報センターの使命は、システム全体の計画と調整、データベースの形成、ネットワーク・システムの整備、研究開発、教育訓練などとなっている。

この内の教育訓練に関係するものとして、学術情報センター及びその前身機関で行われてきた研修の種類には、セミナー、タスク・フォース、総合目録データベース実務研修、目録講習会などがある。

1)セミナー

学術情報システムを構築するための知識・技能の習得を目的としているもので、図書館システム課程とデータベース課程の2つからなる。

1. (図書館システム課程) 図書館情報システムの管理と要員育成の能力の開発
2. (データベース課程) データベースの形成・運用能力の開発

このセミナーの歴史を振り返ってみると、そもそもその始まりは中堅の図書館職員に対して図書館情報学の研究の機会を与えるために昭和47年度に東京大学附属図書館に開設された「図書館情報学セミナー」にある。昭和51年度からは東京大学情報図書館学研究センターに引き継がれ、更に昭和58年度には東京大学文献情報センターに引き継がれセミナーの名称も「文献情報センター・セミナー」となり、昭和61年度には学術情報センターの発足にともない「学術情報センター・セミナー」と名称を変えたものである。「図書館情報学セミ

ナー」がどちらかと言うと研修生個人の研修テーマを主眼に研究を重視したのに対して、「文献情報センター・セミナー」へと変わった昭和58年度からはOJT (On the Job Training) の導入など、学術情報システムの進展に即して、より実務を重視する方向に変化して来ているように思われる。内容的には3)の総合目録データベース実務研修と重なる部分が増えて来ているように見える。

また、昭和62年度以降は中断しているがこれは学術情報センターの業務上の都合のための一時的なものか、あるいはセミナーの役割が終了したためか、あるいはセミナーの目的や性格の見直しの必要性に迫られているためかなどは詳らかではない。研修期間は実質15週間。昭和47年度から昭和57年度までに80名(京大から11名)、58年度から61年度までに39名(京大から3名)が修了している。

2)タスク・フォース(特別研修)

各大学の図書館や大型計算機センターから学術情報センターへ併任という形で長期間(概ね半年から1年程度)出向し実務を手伝いながら学術情報システムについての理解を深めるというシビアな研修、(というよりも助っ人?)。

文献情報センター時代を含めて昭和59年度から63年度までの間に計21名(京大から4名)が参加した。その後は学術情報センターの機構の整備などによりタスク・フォースという形の研修は行なわれていない。

3)総合目録データベース実務研修

(内容は文頭で既述)

昭和60年度は東京大学文献情報センターデータベース担当者養成研修として行われ、昭和61年度より学術情報センター総合目録データベース実務研修と改められた。期間は昭和60年度11週間、昭和61年度8週間、昭和62年度からは4週間とな

っている。

昭和60年度から平成元年度までで合計9回、12名(京大から9名)が修了している。

4)目録システム講習会(昭和59、60年度は東京大学文献情報センター)

大学図書館における目録担当者が学術情報センターの目録システムに習熟することを目的としている。目録担当者は原則としてこの講習会または下記の地域講習会を受けなければ目録入力は出来ない。期間は3日間。尚、今年度からは4日間となる見込みである。昭和59年度から平成元年度までで合計28回、664名(京大から10名)が修了している。

その他に学術情報センターと接続図書館との共催で地域講習会(期間5日間)が行なわれている。昭和59年度から平成元年度までで合計45回、463名が修了している。京都大学の場合は電算機のリプレースにともない目録用端末が殆どどの部局に配置されたので今年2月から学内職員を対象に順次講習会が開催されている。

以上、学術情報センターにおける研修について概観したわけであるが、ハードの部分の整備と並行してそれを取扱う「人」の訓練が必須であり、それには時間と予算と人材を積極的に投入しなければならないという当たり前の事を再確認した次第である。

その他にも図書館に関係のある研修は様々な分野にわたって行われており、業務の遂行に不可欠なものとして位置付けられている。

この文を書くにあたり、学術情報センター研修係、目録情報係などからデータの提供をしていただいたこと(集計などで誤りがあれば私の責任)、並びに昨年の研修ではセンターに大変お世話になったことに感謝いたします。

「京都大学における図書館資料の不用決定及び 廃棄に関する取扱要領」について

このたび標記「要領」が下記のように定められましたので報告します。今後本学における図書館資料の不用決定及び廃棄については、本要領によって行われることとなります。

京都大学における図書館資料の不用決定及び廃棄に関する取扱要領 (平成2年3月26日附属図書館長裁定)

本学所蔵の図書館資料について、文部省所管物品管理事務取扱規程(昭和32年5月20日文部省訓令)第28条及び第29条の規定に基づき、不用の決定及び廃棄をしようとするときは、この取扱要領(以下「要領」という。)によるものとする。

(適用範囲)

第1 この要領による図書館資料(以下「資料」という。)とは、京都大学における「物品管理事務の取扱いについて」(昭和47年3月30日総長裁定「本学規程」)第5に定められた「公用図書」をいう。

(供用停止資料リストの提出)

第2 圖書の物品供用官(以下「物品供用官」という。)は、供用中の資料で供用の必要がなくなったもの又は供用することができないと認めたもの(学科図書室等を有し、それぞれ物品供用官を設置している部局においては、部局内での供用換の有無を調査・実施したものとする。)について、供用を停止した資料リスト(以下「リスト」という。別紙様式)を作成し、当該部局の図書委員会等不用の判定を審議する機関(以下「委員会」という。)へ提出するものとする。

(不用の判定)

第3 当該部局の委員会は、リストに基づき審議し、当該部局で不用であるか否かを判定するものとする。

(返納手続)

第4 物品供用官は、当該部局の委員会において不用と判定された資料について、附属図書館分任物品管理官(以下「分任物品管理官」という。)へ返納手続をとるものとする。

(管理換等の照会)

第5 分任物品管理官は、供用換及び管理換の照会を行うものとする。

(管理換の手続)

第6 分任物品管理官は、供用換又は管理換の希望のあった資料について、管理換等所定の手続をとるものとする。

(不用の決定)

第7 分任物品管理官は、供用の必要がなくなった次の各号に該当する資料を管理換等により適切な処理ができないと認めるときは、不用の決定をすることができる。

- 一 重複の資料で保存を必要としないもの。
 - 二 改訂版の出版等により利用価値を失い保存を必要としないもの。
 - 三 時日の経過により利用価値を失い保存を必要としないもの。
- 2 分任物品管理官は、頻繁な使用、利用上の事故等により甚だしく汚損もしくは破損したため、補修が不可能なもの、或は補修に要する費用が当該資料の購入より高価であると認めるときは、不用の決定をすることができる。

(不用決定の承認)

第8 分任物品管理官は、供用換、管理換の希望のなかった資料及び要領第7第2項に該当する資料については、京都大学における「物品管理事務の取扱いについて」第7に基づき不用決定の手続きをとり、附属図書館長の承認を得るものとする。

(廃棄処分)

- 第9 分任物品管理官は、不用の決定をした資料のうち、次の各号に該当する場合は廃棄するものとする。
- 一 売払い価格が、当該資料の売払いのために要する費用に満たないとき。
 - 二 売払うことにより、国に損失を招くおそれがあると認めるとき。
 - 三 その他、売払うことが不利又は不適當と認めるとき。

(蔵書印及び登録番号の抹消)

第10 管理換、売払い及び廃棄の対象となった資料については、当該部局で蔵書印、登録番号を所定の消印により抹消するものとする。

(廃棄の方法)

第11 資料を廃棄するときは、当該部局の職員が直接又は立会いのうえ焼却するものとする。ただし、焼却できないものは、適法な処分を行うものとする。

附 則

この取扱要領は、平成2年4月1日から施行する。

(別紙様式)

物品内訳明細書

登録番号	取得時期	品 目	数量	取得価格	学内所蔵	不用の理由	備考
					有 無		
					有 無		